

日本川崎病研究センターニュースレター

(No. 32) 2016.8.1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター

『メキシコからの訪問者 Dr. Luisa Berenise Gamez Gonzalez』

川崎富作

当センターのニュースレターも今回で 32 回になりました。

今年 5 月に東京女子医大八千代病院の濱田洋通先生の案内で、メキシコから Dr. Luisa Berenise Gamez Gonzalez が一冊の本を持って、神田のオフィスを訪ねてくれました。それは『Enfermedad de Kawasaki』というスペイン語で書かれた川崎病の本で、表紙には「川崎病」と達筆な漢字で書いてありました。その本は、彼女の教授である Professor Marco Antonio Yamazaki Nakashimada との共著で、表紙に書かれた「川崎病」の文字は、日系人である教授のお父さんの直筆とのこと。彼女は研究内容を持参のパソコンで見せてくれましたが、その日はどうしてもパソコンの調子が悪く、結局、見る事ができなかったため、後日出直してもらうことにしました。

7 月の中旬には Dr. Gonzalez がパソコンを持参して濱田先生と再びオフィスを訪ねてくれました。今回はパソコンの調子もよく、彼女の研究内容を紹介する数多くのスライドを見ることができました。数多くあるカラー写真は、日本における川崎病患者とまったく同じ症状を呈していることに、驚きました。

彼女によると、メキシコでも川崎病の患者数は、増加傾向にあるとのことですが、まだ、メキシコ全体では医師および医療関係者の川崎

病に対する認識は低いようです。これは中南米においても一般的に同様で、ある南米出身の循環器内科の専門医が川崎病を認識していなかったという話を最近聞きました。従って、スペイン語で書かれた本は貴重なものだと思います。また、Dr. Gonzalez の川崎病に対する関心の深さに感銘を受けました。彼女は日本で川崎病をもっと勉強したいと、東京女子医大八千代病院に短期留学していました。6 月 11 日に日赤医療センターで行われた第 35 回関東川崎病研究会にも Dr. Gonzalez は出席し、発表を大変熱心に聞いていました。彼女の川崎病研究に対する熱心さの表れだと感じました。

残念ながら、再会の三日後にはメキシコに帰国されましたが、2 年後の国際川崎病学会には来日すると約束してくれました。彼女たちのグループによって、メキシコでも川崎病の研究が更に進められ、2 年後にはメキシコを始めとする中南米からも数多くの研究者たちが参加してくれることを今から楽しみにしています。

(当センター理事長)

ニュースレターNo.32 をお届けいたします。
ご意見ご感想をお寄せ下さい。

川崎病に取り組むメキシコの小児科医の 来邦と交流

濱田洋通、Luisa Berenise G3mez Gonz3lez

前号 (30 号) で、国立循環器病研究センターの津田悦子先生がメキシコの先生から勉強したいという連絡があったと書かれていましたが、おそらく、その先生が下記のレポートを寄せてくれた小児科医、免疫医の Berenise Gonz3les 先生だと思います。2016 年 5-6 月 2 ヶ月間にわたり我々の施設に visiting し、川崎病の診療、研究に参加していただきました。

小柄でおしとやかなベレ先生は人気者で、初めての外国人ドクターとの勤務でしたが 2 ヶ月後には皆、英語で話すことがすっかり日常となり若手医療者達にとっても貴重な経験を与えていただきました。24 名の新規の川崎病入院患児を共に診察し discussion しました。研究では千葉大学に通い、尾内善広先生、江畑亮太先生にもお世話になりました。ベレ先生が欧米でなく日本で川崎病の勉強をしたいと思ったのは、川崎病が日本で発見された病気であるからです。オリジナルである日本で勉強してきなさいという Prof. Yamazaki の示唆もあったと聞きました。川崎先生のオフィスには 2 回来訪させていただき、ご家族とも交流できました (写真)。帰り道は感激しておりました。川崎先生からニュースレターにお誘いいただき、ベレ先生自身に寄稿していただきました (以下)。

これを機に世界各国、特に新興国での医療経済・医療事情を踏まえた診療について、日本も積極的に交流し、議論したいと考えるようになりました。

KAWASAKI DISEASE A MEXICAN VIEW

Kawasaki disease (KD) was first reported in Japan in 1967 by a young pediatrician, Dr. Tomisaku Kawasaki, who made an amazing and accurate clinical description widely accepted as clinical unchanged criteria to diagnose the disease.

Ten years later the first classic KD patient in Mexico was described, and for unknown reasons the second report was until 1988, so there is a gap where no patients were published. In fact, only a few case reports and series of cases are published, so today we don't know the real epidemiology of the disease. The name of Kawasaki disease is a dilemma in Mexico, because many colleagues wrongly think that it is a rare condition seen only in Asian children.

KD has now been reported worldwide. In Mexico, we have seen an increase number of patients with KD over the years, however it is not clear if this represents an actual increase in the incidence of the disease or an increased awareness of the condition

In 2015, together with Dr. Yamazaki, we published a KD book in Mexico, in collaboration with different doctors in all the country who have experience in KD. The

main objective of this project was to spread the knowledge of KD in all the spanish speaking countries.

Recently, I had the great opportunity to stay as a visitor scholar in the Pediatric Department of Yachiyo Medical Center in Chiba, with the deep conviction to learn more about KD and start doing clinical and scientific research of this fascinating disease in Mexico.

In Japan, I learned directly from doctors who have a lot of experience in the diagnosis and treatment of KD, and participated in a training program with Professor Hiromichi Hamada, a Cardiologist Pediatrician, who had a huge impact in my medical career. I noticed that Japanese and Mexican KD patients were the same in terms of the clinical manifestations, but in Japan I learned how to give these patients a closer follow-up, and how to approach severe cases. I also visited Dr. Yochihiro Onouchi, who taught me his great contribution in the genetics of KD and his future investigations. I am sure they will be very important in the field.

One of the highlights of my visit to this great country was meeting Dr. Kawasaki and his beautiful family. I realized that I talked with one of the most important pediatricians of the world and it was a great honor to me. His historic contribution in Pediatrics is incredible and his continuous effort in all the KD

research is admirable. I have to say that Dr. Kawasaki is a warm and gentle person. He also gave me the chance to talk about my experience in KD patients

I am deeply grateful to Hamada sensei who was my mentor in Japan and gave me this unique opportunity. I think we built a strong bond between our countries and I look forward to continue working together in this disease.

Coming from a different country I felt welcome and embraced without frontiers. I wanted to learn with the objective to make improvements in the daily care of our children, and I am sure I did. Thank you KD patients, thank you Dr Tomisaku Kawasaki, thank you Dr Hiromichi Hamada, thank you Pediatrics Department of Yachiyo Medical center , thank you Japan .

ARIGATOGOZAIMAS

Luisa Berenise Gámez González

Pediatric Allergy and Clinical Immunology
Children Hospital Chihuahua, Mexico

e mail: dra.luisa.gamez@gmail.com

(東京女子医科大学八千代医療センター小児科)



(本は Prof.Yamazaki とベレ先生によるメキシコでの川崎病の初めての教科書。題字は Prof.Yamazaki の父の友人による)

南米チリからも・・・

川崎富作

つい先日、久留米大学名誉教授の加藤裕久先生よりある新聞記事を同封した手紙を受け取りました。二十数年前、南米のチリから来日した川崎病患者のカミラちゃんは、久留米大学病院の加藤先生のもとで冠動脈のバイパス手術の治療を受けました。そのカミラちゃんをご両親とお姉さんとともに再来日したという記事でした。

当時、まだ小さかったカミラちゃんも、今では 29 歳の医学生になったそうです。二十数年前に来日した際には東京にも一家揃って訪ねてきてくれました。その後、我々も学会のついでにチリを訪れ、カミラちゃん家族と再会し、交流を続けていました。ここしばらくは交流も途絶えており、今回直接会うことはできませんでしたが、加藤先生を通して彼女が元気で医師を目指しているという嬉しいニュースを聞くことができました。将来、彼女が医師として活躍することを楽しみにしています。

Japan, Kawasaki Disease Research Center

Japan, Kawasaki Disease Research Center



Aiko Shimojima

トケイソウ

第 36 回日本川崎病学会：川崎病研究と私

石井正浩

私は、1985 年に久留米大学医学部を卒業して同年小児科学教室に入局しました。当時から川崎病の患者さんは沢山いました。その後 1990 年より小児循環器グループに入れてもらい加藤裕久教授の指導の下サブスペシャリティの研修を開始しました。与えられたテーマは画像診断で特に心臓エコー検査の臨床および研究に夢中になりました。川崎病患者も診療していましたが特別に興味があるわけではありませんでした。1994 年から 2 年間、米国に留学しましたがこの時の研究テーマも心臓エコー図でした。帰国後、川崎病を中心に診療や研究をやっていた杉村先生が大学を去り開業することになったので加藤裕久教授から川崎病の診療や研究を石井君やってくださいと言われてました。当時、教室のメインテーマであった川崎病ですから私には荷が重すぎますとお断りしようと思ったのですが、次の優秀な人材が見つかるまでのつなぎだからと言われ了承しました。しかし、川崎病という病気は、不思議な病気で一度冠動脈瘤が出来ると遠隔期まで問題となります。久留米大学には遠隔期の患者さんが沢山いましたので加藤裕久教授の指導の下で遠隔期の冠動脈血管内皮機能の研究を行いました。その結果 regression した症例でも遠隔期に血管内皮機能が低下していることが判明しました(JACC, Heart)。これは、絶対、急性期に冠動脈障害を作ってはいけないと考え急性期治療の研究を開始しました。特に治療開始時期やステロイドや層別化に関する物です(Pediatr Int, J Pediatrics, Pediatrics)。また、遠隔期の冠動脈狭窄病

変に対するカテーテル治療を循環器内科と共同で開始しました(Circulation)。病因の究明のため病態に関する研究を開始し接着分子や血管内皮増殖因子に関する研究を開始しました(Acta Paediatr)。川崎病の不思議さに魅了され研究一色の生活となりました。2004年に北里大学に移動してからは、急性期の研究が中心となっています(J Cardiol)。ステロイド治療の前視法的ランダム研究(Pediatr)や急性期ステロイド治療(Pediatr Res)やレミケード治療(Pediatr Res)のメカニズムを分子生物学的手法で解明する研究を行っています。また、病因へのアプローチとして免疫学教室と共同して川崎病の自然免疫を解明すべく努力しています。これらの研究は、研究に協力してくれた川崎病の児を持つご両親、患児本人、私の回りの多くの仲間たちの協力でなした物です。本当にありがたいと思っています。さて、本年9月30日10月1日に第36回日本川崎病学会を主宰させて頂くことになりました。日本中から川崎病の研究者たちが集まり熱い討論が成されると信じております。それぞれの研究には研究者たちの血のにじむ様な努力と情熱が込められています。どの抄録も素晴らしい内容です。素晴らしい学会になると信じております。この学会で発表された物が将来原著論文として世界に発信されることを願っております。是非、皆さん参加してください。

(北里大学医学部小児科)

Japan Kawasaki Disease Research Center

Japan Kawasaki Disease Research Center

第35回総会を迎える「親の会」

浅井 満

本年9月18日(日)、1982年(昭和57年)に発足した「川崎病の子供をもつ親の会」は第35回総会を迎えます。発足当時は誤解と偏見の中で川崎病児は苦しんでいました。既往川崎病児は全員体育の授業は見学！既往川崎病児は修学旅行禁止！川崎病はうつる病気だから遊びにこないでほしいという声！〇〇ちゃんの家に行ってはだめだよ、あそこはダニが多くて川崎病になっちゃうよという声！・・・等々。私たちは機会あるごとに川崎病への正しい理解を求め会報「やまびこ通信」で訴えて来ました。そして川崎富作先生をはじめ全国の医師、研究者のご協力を頂戴し、講演会と相談会を全国で開催してきました。その数は400回を優に超え、500回に迫っています。会報は創刊号発行以来一度も休むことなく隔月に発行し続け、昨年12月には200号記念号を発行することも出来、センター理事長である川崎富作先生、副理事長の直江史郎先生からお祝いの原稿を頂戴し、掲載することが出来ました。

さすがこの間、川崎病既往児全員に対して体育の授業は見学というニュースは届いていませんが、うつる病気の誤解は根強くあるようです。ある意味、原因不明であるが故、「絶対、うつることはない」と言えない所が問題かもしれませんが！

そのためにも原因究明が必要です。原因さえ究明出来れば子どもたちへの誤解と偏見も数多く解決出来るのではないかと感じております。

節目でもある第35回総会記念講演会はお二人の先生をお迎えして開催します。

川崎病

講演会 と 相談会



【日 時】2016年9月18日(日) 13時30分～16時30分
 【場 所】林野会館(文京区大塚3-28-7)(地下鉄丸の内線「茗荷谷駅」徒歩7分)
 (地下鉄有楽町線「護国寺駅」・三田線「千石駅」徒歩12分)
 (JR大塚駅よりバス千石三丁目下車すぐ・タクシーワンメーター)

【講 師】
 I 中村好一 先生
 (自治医科大学公衆衛生学)
 「疫学像から川崎病の原因を考える」
 II 鮎沢 衛 先生
 (日本大学板橋病院小児科)
 「川崎病後の心臓障害と向き合おう」



【後 援】東京都・東京都教育委員会・東京都医師会
 文京区・文京区教育委員会・文京区医師会・小石川医師会
 入場無料(どなたでも参加できます)・別室で実況中継有(子連れ可)
 【主催・連絡先】川崎病の子供をもつ親の会 浅井 0467-55-5257

ではないかと思えます。

今年の事業報告会でも公募研究の報告があり、川崎病と向き合っている若い医師、研究者の発表をお聞きしました。私としては少し難解の内容でしたが、若い医師、研究者が川崎病に興味をもって頂くことは大歓迎ですし、原因究明を目指す研究であれば今年も公募研究制度を実施していますので、どしどし応募してほしいと思えます。

また、原因究明のために「親の会」として協力できることがあればご提案下さい。まさに全国の仲間が協力してくれることと確信しております。9月18日(日)の第35回総会を実りあるものとし、36年目の活動を目指すことをお伝えします。

(川崎病の子供をもつ親の会代表)

今年もセンターの総会と事業報告会が6月4日(土)東京神田のエッサム神田ホールで開催されました。その事業報告会でセンターの理事でもある中村好一先生(自治医科大学公衆衛生学)は第23回川崎病全国調査成績を報告されました。改めて川崎病発症の増加に驚いています。2014年の年間発症数と罹患率が史上最高になってしまった訳ですが、川崎病のこの間の増加について、私は社会問題ではないかと感じております。罹患するほとんどの子どもたちは苦しみ、痛みを自分の言葉で表現出来ない、幼い赤ちゃんです。その赤ちゃんが毎年増え続けていること、その内少なくなつたとはいえ心臓に後遺症が残ってしまう赤ちゃんが毎年いること、巨大冠動脈瘤を残す赤ちゃんの数は決して減っていないこと。そして2年間で8人の赤ちゃんが亡くなっていること。まさに川崎病の原因究明は急務

Japan Kawasaki Disease Research Center

Japan Kawasaki Disease Research Center



Aiko Simojima

コスモス

事務局から

【センター日報】

- 平成 28 年 5 月 20 日 平成 28 年度第 1 回理事会開催 6:00pm～（於:当センター）
平成 28 年 6 月 4 日 平成 28 年度総会と研究報告会（於:エッサム神田）1:30 pm～
各年度の事業報告及び会計報告、次年度の事業計画及び予算計画は総会議事録と共に
当センターでいつでも閲覧できますので、お気軽にお立ち寄りください。
平成 28 年 6 月 4 日 平成 28 年度第 2 回理事会開催 17:00 pm～（於:エッサム神田）
平成 28 年 8 月 20 日 平成 28 年度公募研究選考委員会開催 13:00 pm～（於:当センター）
平成 29 年 3 月 10 日 平成 28 年度第 3 回理事会開催予定（於:当センター）

【特定非営利活動法人日本川崎病研究センター会員総数 265】平成 28 年 4 月 現在

[正会員：91 名、4 法人、6 任意団体]：[賛助会員：138 名、2 法人、1 任意団体]

【研究会・学会】

- ★ 第 17 回北海道川崎病研究会 平成 28 年 9 月 3 日（土）16:00～ 於：札幌 REI ホテル
代表世話人:布施茂登先生（NTT 東日本札幌病院小児科）
- ★ 第 36 回日本川崎病学会 平成 28 年 9 月 30 日・10 月 1 日（金・土）於：ワークピア横浜
会頭:石井正浩先生（北里大学医学部小児科）
- ★ 第 41 回近畿川崎病研究会 平成 29 年 3 月 4 日（土）13:00～ 於:テイジンホール
会長:城戸佐知子先生（兵庫県立こども病院）
- ★ 第 36 回東海川崎病研究会 平成 29 年 6 月 予定 於:愛知県医師会館
地下 1 階「健康教育講堂」 当番幹事:
- ★ 第 36 回関東川崎病研究会 平成 29 年 6 月 予定 於:日赤医療センター 講堂
事務局代表:土屋恵司先生（日赤医療センター小児科）
- ★ 第 12 回国際川崎病シンポジウム 2018 年 6 月 5～8 日 於: Pacifico Yokohama, Japan
問い合わせ先：日本川崎病研究センター Tel:03-5256-1121, Fax:03-5256-1124
- ★ 「川崎病の子供を持つ親の会」問い合わせ先： Tel:0467-55-5257 浅井 満

新会員募集にご協力ください!!!

正会員 年会費 20,000 円

賛助会員 年会費 5,000 円

【川崎病に関するご相談】

当センターでは、川崎富作理事長が川崎病に関するご相談を受けております(無料)。お電話お手紙、Fax 等でご相談をお寄せください。(電話：火曜日：午後 2 時～)

特定非営利活動法人日本川崎病研究センター

〒101-0041 東京都千代田区神田須田町 1-1-1 久保キクビル 6 階

Tel:03-5256-1121 Fax:03-5256-1124

特定非営利活動法人

日本川崎病研究センター

〒101-0041 東京都千代田区神田須田町 1-1-1 久保キクビル 6 階

● Tel:03-5256-1121 ● Fax:03-5256-1124